

論文 2

思春期心性と不登校

臨床心理士/スクールカウンセラー
愛知教育大学大学院 教育臨床総合センター センター長
同志社女子大学 教職課程センター 特任教授

中川 美保子

はじめに

“小中学生「90日以上欠席」7.2万人”—これは、文部科学省が発表した「2015年度不登校児童生徒数の速報」を一面で報じた新聞の見出しである（2016.10.28付、朝日新聞朝刊）。記事では、年度中に30日以上欠席した小中学生は12万6009人で、このうち90日以上欠席した子どもたちが7.2万人と全体の57.4%にも上り、記事はこれを「不登校の長期化現象」として、危機感を持って伝えている。また、千人あたりの不登校の人数は12.6人で、この形態の統計を取り始めた1991年以降最多だったこともあげられている。

1990年前後より、我が国では不登校への対応が喫緊の教育問題として取り上げられるようになり、以降20年あまり、「教育支援センター」の開設などの公的な対策のみならず、フリースクールや「親の会」など、民間の対応策など多方面からの支援の試みがなされてきた。そして、これらさまざまな支援には、ある程度の効果が見受けられるとの研究結果や実践報告がまた重ねられている（徳田、2000）、（木南、2005）、（野田、2012）、（井上、2013）。しかしこの記事で報じられているように、不登校を人数でとらえるならば、決して楽観できる状況ではなく、これまでの対策の見直しや、より効果的な予防策、新たな支援策が早急に求められていることもまた、紛れもない事実である。

不登校問題の著作に関しては、上記のように筆者が専門とする教育臨床心理学をはじめ、教育学、教育社会学など隣接する諸分野における多くの研究成果や実践報告がすでにあまた存在する。筆者自身も、これまで30数年間、中学教師として、スクールカウンセラーとして、そして大学教員として不登校と関わり、機会あるごとに幾度となくこの問題について論じ語ってきた。しかしながら本稿の執筆に臨むにあたり、不登校問題についてこれまでの文献を検討し、この問題の諸側面を網羅し、総合的に論を広げることは筆者の力量を超えていると思われる。そこで貴重な執筆の機会を得た本稿では、筆者が特に関心を寄せてきた思春期心性と不登校に視点を絞って論じていきたいと思う。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

1. 不登校の現状から

表1は、文部科学省（2016）から発表された、平成3年度から平成27年度までの不登校児童生徒数の推移の表より、平成27年度を取り上げたものである。改めて述べるまでもなく、小中学校別で不登校数を比べてみれば、圧倒的に中学生が多数であることがわかる。当然、比率としても中学生がほぼ7倍に上る。

図1（文部科学省、2016）は、平成3年度から平成27年度までの不登校児童生徒数の割合を示したものであり、すべての年度にわたって中学生が小学生よりも高い比率で不登校状態にあることを示している。

さらに図2（文部科学省、2016）は、平成27年度の学年別不登校の人数を示している。

表1 平成27(2015)年度の不登校児童生徒数と校種別人数

（文部科学省「平成27年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」速報値、2016年の表より筆者が抜粋したもの）

区分	小学校			中学校			計		
	(A)全児童数 (人)	(B)不登校児童 数(人) カッコ内 (B/A ×100) (%)	不登校児童数 の増▲減率 (%)	(A)全生徒 数(人)	(B)不登校生徒 数(人) カッコ内 (B/A ×100) (%)	不登校生徒数 の増▲減率 (%)	(A)全児童生徒 数(人)	(B)不登校児 童生徒数の合 計(人) カッコ内 (B/A ×100) (%)	不登校児童生 徒数の増▲減 率(%)
27年度	6,543,104	27,581 (0.42)	6.6	3,481,839	98,428 (2.83)	1.4	10,024,943	126,009 (1.26)	2.5

(注1)調査対象：国公立小・中学校(平成18年度から中学校には中等教育学校前期課程を含む。以下同じ。)

(注2)年度間に連続又は断続して30日以上欠席した児童生徒のうち不登校を理由とする者について調査。不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること(ただし、病気や経済的理由によるものを除く。)をいう。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

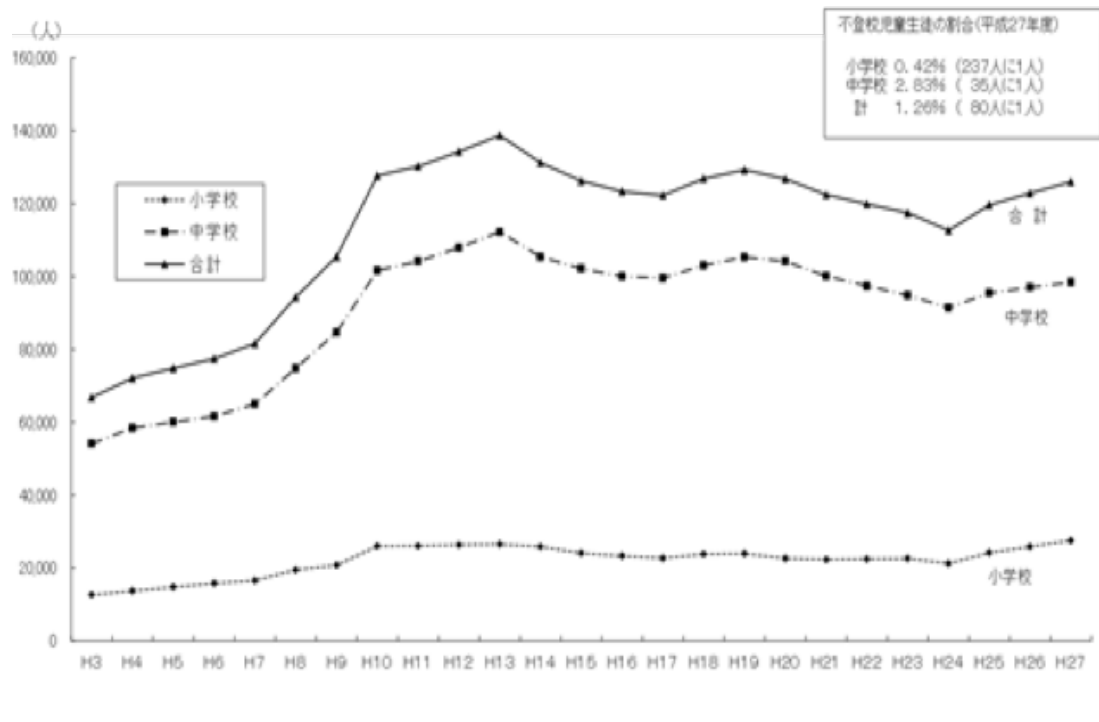


図1 不登校児童生徒数の割合

(文部科学省「平成27年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」速報値、2016年より)

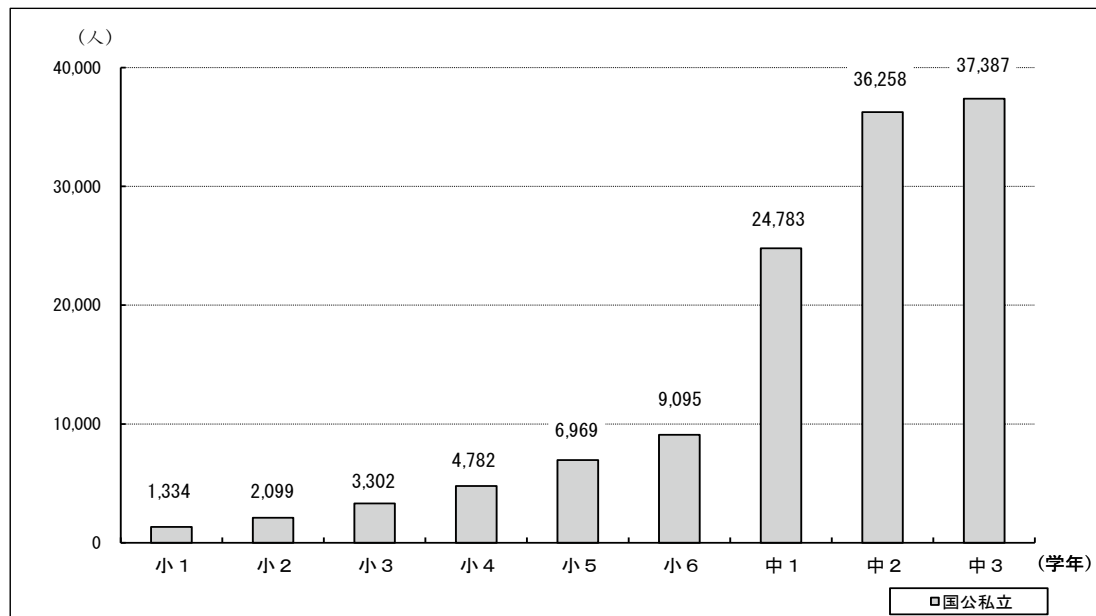


図2 学年別不登校数(平成27年度)

(文部科学省「平成27年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」速報値 2016年より)

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

図2からは、不登校児童生徒数が小学校1年生から学年が高くなるにつれて、いわゆる右肩上がりに増加していることがわかる。さらに詳しくみると、小学校4年生から中学校2年生までは学年ごとの増加数がそれまでよりも多くなっていること、特に顕著なのが小学校6年から中学校1年にかけてであり、次にグラフの右肩上がりのカーブが急傾斜を示すのが、中学校1年から2年にかけてであることがわかる。ただし、このグラフの見方として、各学年の不登校数は必ずしもその学年で始まった新たな人数と見なすことはできない。それは、年度を重ねて不登校を続けている子ども達も相当数いるからであり（注1）、学年が上がるごとにその人数が上乗せされることを考慮しなければならないからである。しかし、それを加味して考えても、中学校1年および中学校2年の不登校人数の増加が顕著であるということが言えるだろう。

つまり、図2からは、不登校は1学年以上など長期に不登校状態である子どもを内数に含みながら、学年が上がるごとに増加していること、特に中学校1年と2年の段階で新たに不登校となる子ども達が多い可能性があること、その結果、最終学年である中学校3年が最多数であることがわかる。

以上、表1と図1、2より、不登校は小学生よりも中学生の方が圧倒的に多いこと、加えておそらく、中学生になってから新たに不登校状態となる子どもたちが多く存在することが推測できる。なぜ不登校は中学生の方が小学生よりも多いのだろうか。

たとえば不登校のみならず、中学校1年生が抱える様々な心身の不調に関して「中1ギャップ」（注2）という用語で説明されることがある。彼らが抱える問題の原因として—英語や数学など新たな教科や高度な思考を要する教科の増加、部活動が本格化、在籍小学校以外からの新たな友人関係、教科担任制 etc.—があげられるが、これとよく似た問題はおそらく高校入学時や大学でも起こるように思われる。しかしながら、高校、大学入学時には、中1ギャップほど大きく取り上げられないのに、なぜ中学校では大きな問題となるのだろうか。

そこで次章より、これまで拙著に掲載した中学生の不登校事例を改作したものと新たに筆者の臨床体験に基づいた創作事例を取り上げ、「なぜ不登校が中学生に多いのか」に焦点化して、この時期の彼らの心性である思春期の特徴との関連から論じていきたい。

（事例はプライバシー保護に配慮する観点でも創作を加えている）

（注1）文部科学省からは、平成27年度の速報値とともに、年度をまたいでの不登校が増加していること、不登校の長期化への懸念が示されている。

（注2）英語や数学など、初めて学ぶ教科への戸惑いや、本格的な部活動で心身ともに疲労するなど、中学校進学に伴う新しい環境への不適應等の課題が問題視されている。

2. 思春期と協調性—同調圧力

この事例は、中学2年のある学級で、合唱コンクールの練習中に起こったいじめ事件から不登校になってしまったA（男子）に関する経過である。このクラスの担任は30代前半の教育熱心で子ども達にも人望が高い男性教師であり、彼の指導力の高さもあって勉強にも行事にもクラス全体でまとまって頑張るといふ、他のクラスからうらやましがられるような団結力の高さを誇っていた。合唱コンクールの練習にも当初は、みんなが一丸となって取り組んでいるように見えたのだが……。

<事例1>

2学期が始まって1ヶ月、2年3組は10月半ばに行われる合唱コンクールの優勝に向けて、一丸となって練習に励んでいた。実はこのクラスは、2週間前に開催された運動会でも隣の2組が優勝の本命と言われていたにもかかわらず、最後の応援合戦でチームワークを評価され、逆転優勝していた。それでクラス内は「連続優勝」に向かって、押せ押せムード一色に染まっていた。このクラスの担任は学級経営には評価の高い30代の言わば熱血教師。彼の「チームワークNO.1のクラスをめざそう」という生徒たちへの熱心な働きかけに女子生徒たちが頑張り出したのが発端で優勝という結果を生み出したのだった。1学期末には、遅刻ゼロ運動で学年一の連続記録達成を続け、2学期当初には運動会に優勝するなど学年一のチームワークのあるクラスが実現していた。

ところが、合唱コンクールの練習をする中で、どうしても音程の合わせられないAの存在がこのチームワークに微妙な乱れを起こすようになった。バスのパートのAは、皆と同じように精一杯の声を張り上げて歌うので、どうしても低音部が主旋律になると、彼のはずれた声が全体に悪い影響を与えてしまうのだった。いつしかリーダー格の子どもたちから「A君、ちょっと声大きすぎるよね。みんなの気持ちわからないの。」とか、「A、クラスのためにね、くちパクしてくれないかな。」などの要求が出されるようになった。しかしそれがAには悔しかったのか、それからは非難されればされるほど、わざととしか思われぬような大声を出して練習を中断させたり、ふざけて違う歌詞を歌うなど、あからさまに練習の邪魔をするようになった。皆の練習に熱が入れば入るほど、Aのふざけによる妨害はひどくなって皆の高揚した士気をそいでしまうのだった。そんな事情もあって、授業中や休み時間にAに対してあからさまにいやな顔をしたり、避けたりする子どもが出てくるようになった。

この様子を察知した担任が「どうして、A君をいじめるんだ」と、逆に皆を叱った。しかしこのことをきっかけに、さらにAへの悪口がエスカレートした。それはAの音痴をなじるだけでなく、運動が苦手なことなど能力だけでなく、少し太っていることと身体的な特徴にまで及んだ。とうとう合唱コンクールの前日には、男子トイレで、3組の数人の子どもたちがAを取り囲み肩をこずきながら、「A、明日休んだらあ」と口々につぶやいた。暗い表情で帰宅したAから事情を聴きだした母親は、Aをコンクール当日、欠席させ、担任にいじめの存在を伝えたが、残念なことにその日以来、Aは不登校となり二度と3組に顔を見せることはなかった。

Aの不登校はその後、卒業まで続いたが、3年生の5月から通室し始めた教育支援センターで次第に元気を取り戻し、Aの希望で昼間制の定時制高校に進学することとなった。その高校には不調を訴えることもなく通学を続け、中学の頃を振り返って、「僕はみんなに合わせることはできなかった。僕はみんなからいない方がいいと思われた。仲間になれなかった」と語った。

<考 察>

「合唱コンクール優勝」というこのクラスの願いはかなえられたが、同時に A を被害者とするいじめ事件が起こってしまったのはなぜだったのか。おそらく当初加害者となった子ども達には、A をいじめようとする意図はなかったように思われる。だが、クラス一丸となって頑張るはずの合唱に A の歌声は排除すべきもの、歌い出されては集団のまとまりが乱される原因と彼らには思えたのだらう。しかしこの時点でも彼らに A をいじめる悪意はなかった。A がいじめのターゲットとなってしまうのは、彼らの「A, くちパクしてくれないかな。」との要求に素直に従わない A の態度、さらに決定的だったのはその A のために信頼してきた担任からまで非難されたことだったように思われる。

A は A なりにクラスの優勝のためにもっと練習したいと思っていたのだが、クラスの子どもの目には、A は自分勝手にチームワークを乱し、そしてそのために何よりも自分たちのがんばりを認めてもらいたい担任にまで誤解を与える元凶と見えたのであろう。クラスのために頑張ろうという真摯な思いを持った子ども達の集団だったからこそ、その集団の団結を乱す A は、異端として排除されていったように思う。

もしも運動会や合唱コンクールへの取り組みが、このクラスのような団結することへの過度の協調性—それは同調を強いる圧力とも言えるような雰囲気クラスに強いていた—を求めるものではなく、もう少し個人の個性を許すような柔軟な空気の中で行われていたなら、A をいじめた子ども達にも、A の失敗を許す心の余裕があったに違いない。また A も自分が音痴であることに対して、それほど劣等感を持たずにすんだのではないか。

「自分とは何者なのか」、「他の誰とも異なる自分の個性とは」など、自我同一性を模索する思春期の子ども達にとって、なりたい自分の姿を集団と協調する中で見出せることが理想的なのかもしれない。しかし A のように、自らの個性と集団の求めるものが一致しなかった場合、他者に迎合することを潔しとせず反発し、さらに集団から排除され自らの居場所が求められないという悪循環を招きやすい。思春期の子ども達が凝集性の高い集団を構成する場合、ひたすら他者との協調性を求められる背後に、「集団の団結力を乱すものは排除すべし」という目に見えない同調圧力という“空気”のような雰囲気が存在し、個性を否定される子どもが存在することを見逃してはならないのである。

3. 思春期と自己否定

次の事例は不登校の B（中 1 男子）を担当している教師がスクールカウンセラー（以下 S C）に相談を持ちかけたことから展開する。ある日この担任が家庭訪問すると、早く学校復帰したいと答えた B だったが、担任が帰ってからは落ち込みが激しく、部屋に閉じこもってしまったと母親から電話があった。翌日改めて母親が来校して語ったところでは、B は昨晚、夕食も取らずに部屋から出てこなかった。そんな我が子に母親は最悪の状態を想像して不安になり、取るものも取りあえず担任に相談しようと思ったとのことだった。B の様子や自分の思いを担任に語ってくれたことから、担任が今後の対応について、S C と相談することになった。

<事例2>

家庭訪問した担任は、そのときのBの様子を「玄関まで出てきてくれました。一階のリビングに通されて、お母さんと一緒にBと話しました。家では少しは休めているかな、と問いかけたのですが、『先生、来週から学校に行きたいと思っています。行ける気持ちがあります。今日は来てくれてありがとう』と言ってくれました。無理しなくていいからと話しました。それからBは部屋に戻ったので、もう少しお母さんと話して学校に帰ってきたのですが」。その後、息子が部屋から出てこないと母親から電話があったのだった。

そして翌日の母親の来校時の彼女の話聞いて、S Cと連携した方がいいと考えて母親に勧めたら、相談に前向きだったので相談を受けてほしいとのこと。早く母親が来談したいとのことだったので、翌週からS Cと母親との相談が始まった。

そこで母親が語ったところでは、Bはとても素直でおとなしい子どもだった。小学校では特に目立った活躍をするわけではないが、同性の仲間もいて楽しくそれなりに過ごしていた。ところが、中学に入学して勉強に部活に習い事にと一日にやるのが小学校よりも格段に増えてしまってから、Bの表情がだんだんと暗くなった。Bなりに多教科に渡る宿題を毎日こなし、部活の道具も含めて持ち物も忘れ物がないように気を配っていた。母親からみても頑張っていて涙ぐましいくらいだった。不登校になってしまったのは、5月の連休明けにウイルス性の腸炎になって一週間ほど学校を休んだのがきっかけだった。ちょうどその期間に部活動の対外試合があって、一年生の他の部員と一緒に、試合に必要な用具やお茶などの準備をして会場まで運ぶ役目があったのだが、病欠で自分だけできなかったのが負い目になったよう。病気が治ってもそのまま休み続けてしまった。家でも昼間は勉強していたり腕立てしたりして体力をつけたりしていた。

先日の担任の家庭訪問の後、もう一度リビングに戻ってきて、『先生、僕が休んでいるのでわざわざ家まで来たんだよね。先生言わなかったけど、たぶんクラスの間みんな掃除とか係の仕事とか僕のみまでやってるから、怒ってるよね。部活も休んでいて、顧問の先生に見捨てられてる。ペアで練習してくれる子もういないよね』とうつむき加減に話したという。母親が“みんなそんなこと思ってないよ。学校に行けばきっとまた普通につきあえるよ”と慰めたが、『僕が弱虫なんだ』とぼつりと言って、そのまま部屋に戻ってしまったのだという。

この事例は、母親との相談が継続し、その後B自身が相談室に来室するようになって、S Cと打ち解けることができた。2年生の4月に再び教室に戻ったBだったが、その後一度相談室に顔を出して不登校だったときの気持ちを少し語ってくれた。『いつも先生やクラスみんなに悪いことしてると思って、いらいらしていた。学校行けない自分が悪いのに先生やみんなに気を遣われるのがいやだった。お母さんはわかってくれていたけど、そんなお母さんに一番迷惑かけているのがもっとつらかった。この相談室もお母さんが行こうと言ったから、お母さんの期待を裏切りたくなくてきたんだよ。最初は来るのがいやだった。でも先生は、あまり不登校のことを僕に話させようとしてなくて安心できたよ。ここってなんか重たい感じがなくて楽だった。』と語っている。

さらにもうひとつ事例を記載してから、事例に共通している思春期の特徴を取り上げて考察しよう。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

次の事例は、いじめ被害者C（中2女子）が担任からの「いじめられているなら自分に話してほしい。絶対に君を守るから」との熱心な呼びかけに対して、ようやく心を開いて加害者の名前を告げたことをきっかけに、更なる陰湿ないじめが起こり事態が深刻化したものである。いじめに耐えられなくなったCは、不登校という手段でしかこのいじめから逃れることができなかった。以下は、その後フリースクールに通うようになったCが、過去にいじめと不登校についてスタッフに語った当時の展開である。

<事例 3>

担任の先生が、「いじめられているんじゃないか」って何度も聞いてくれた。君のことは絶対に先生が守ってあげるって。それで、本当は言いたくなかったけど先生がすごく熱かったから、いじめられていること、相手の名前を先生に伝えちゃった。

でも先生はその後、私が教えた加害者たちを呼び出して指導した。彼女らは、私に謝りますと言って、とても反省していたと先生から伝えられた。確かに一人の子からメールで謝られた。先生に「謝られたか」と聞かれたので、そう話すと「よかったな。なんでもゆっくりしているのは君の個性だから、君が悪いんじゃない。いじめられたのは君なんだ。君が我慢することじゃないんだよ。だからいじめられたことを秘密にする必要はない。相手に気持ちを伝えて謝らせばいい」と言われた。でも本当は何も言ってほしくなかった。だって、いじめられたのは私にも悪いところがあったからだったの。

共通にファンだったタレントのコンサートに誘われたとき、お母さんに許可もらわなきゃとかいろいろ考えて、すぐ返事できなくて、ぐずぐずしてて、それで一日返事が遅れてしまったから、A席だったけど、前の方のいい席を取れなかった。みんなに謝ったら、『いいよ』って言ってくれたのに、コンサートの日に出かけるのに手間取って、待ち合わせに遅刻して、またみんなに迷惑かけて……。謝ったよ。その時もみんな許してくれたと思ってたけど。なんで自分ってこんなにぐずぐずしてて、いつもだめなんだろうって。それに先生が、私が悪いんじゃないって話してくれているのを聞いて考えたけれど、先生だっていじめられている私のために彼女らを叱ってくれたんだし、あの子達に言われたくなかったって思う私が臆病だったんだよね。先生にも、クラスでいじめ事件なんて起こして、迷惑かけてたんだって思った。先生が言うとおりの、私をもっと堂々としていけばいじめられなかったんだって思う。

実はね、あの子達はその後もいじめてきたんだよ。ラインで私のことを“チクチクちゃん”ってあだ名で呼び合って“きもい、死ね”って書いてきた。でも、もう担任の先生にも誰にも相談できないし、学校行けば彼女らに出会うし。ここは学校の誰にも会わないからようやく気持ちが楽になった。でもね、やっぱり自分は弱くて情けない。不登校して、お母さんの期待にももうこたえられないこと、お母さんに謝りたい。先生（注：フリースクールのスタッフ）、ずっと自分が悪いと思っていて、そんな自分のこと、ここに来るまで誰にも話してなかったんだよ。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

＜考 察＞

事例2のBのように思春期の子どもたちの場合、不登校状態にある自分のことを格好悪い、恥ずかしい、情けないなどの劣等感を抱き、そんな自分は周囲に迷惑をかけている存在と自己像を描いていることが多い。加えて事例3のCのように、いじめ被害者である場合も、自分にもいじめられるような欠点があったからと納得している子ども達も見受けられる。

他者から見られ評価されている自分を意識するにつれて、児童期よりも身なりに気を遣うようになり、言動が大人びる、あるいは寡黙になる、親に秘密を持つなどの特徴は、思春期の多くの子ども達に見受けられるものである。他者から見られることを意識することは、換言すれば他者との関係の中にも存在する自分の姿を、自らの心の中で像として浮かばせ作ることとも言えるだろう。そして多くの場合、他者の視線の先に浮かぶ自己像は現実よりも劣って見える場合が多い。まして、他の子ども達は当たり前のように通っている学校に通えないBや、グループの中で一番行動が遅くていじめのターゲットにされたCの自己像は、他者が実際に抱いているもの以上に否定的な姿だったはずだ。

このBやCのみならず、思春期の子ども達はしばしば、担任や保護者などから配慮あるいたりや優しい言葉をかけられても、そのこと自体を素直に受け取ることができず、周囲に迷惑をかけている自分を否定的にとらえ、自らの殻に閉じこもってしまうような傾向が見受けられる。このような場合、教師や親が何とか彼らの力になりたいと手をさしのべても、そのような支援には何も反応せず、口を閉ざしてしまいやすい。

過剰な自己否定を抱きやすい思春期の子ども達が、他者にしてほしいことをしっかりと伝えることができ、肯定的な自己像を見出すにはどうしたらよいか、2つに事例の回復の過程を参考にしながら、第V章で考えていきたい。

4. 思春期と世代間境界の形成

最後の事例では、D（中2女子）の不登校に至る経過を記した。彼女は同じ部活の仲間とされていたE達のグループから実際はいじめられていたのだが、担任がそのことを尋ねても否定した。そこで、担任はこの件について、事情を知っているかもしれないと思われる数人の子ども達に同じような質問をするのだが、誰一人の口からもそのようないじめの事実は認められなかった。しかし、実際はDはもちろんのこと、担任が話した全員がDがいじめられている事実を知っていた。ということは、彼らは皆が皆、担任に嘘をつき、知っていることを隠すために全く事実と異なった話を担任に信じ込ませようとしたのである。

なぜ子ども達が担任にありもしないでたらめを話して、いじめという重大な事実を様々な作り事で糊塗しようとしたのだろうか。

この事例によって、II、IIIで述べてきた思春期の特徴をまとめ、さらに思春期の子ども達の心性について考えてみたい。

<事例 4>

いじめの早期発見のために毎月末に実施しているいじめに関するアンケートの自由記述欄に、クラスのDが、同級生のEを中心とするクラスの同性グループから、継続していじめられていることが匿名で記載されていた。だが担任から見るとDはグループの一員で、グループ全員がバスケットボール部に入っている仲間、登下校も一緒だし、週末も部活動で一緒に頑張っている。今秋からはEが新部長になり、Dが副部長になったと顧問からも聞いていたのだが。

それに日頃のDの様子にしても、ジョークが得意でグループ内のムードメーカー、思い悩んでいるようなそぶりは感じられない。アンケートはいたずらだったかとも思ったが、担任としてはそれでも何か気がかりだったので、とにかく本人に確かめてみることにした。担任が聞くと、Dは一瞬、驚いたような表情を見せて、その後こりと笑いながら、『びっくりしたあ、先生。なんで。誰がそんな真っ赤な嘘を言ってるんだか。先生は知らないかもしれないけど、Eとは強い絆で結ばれてるから、親友の誓い立ててるし。親同士も仲いいよ。先生、Eが待ってるから、早く部活行きたいんですけど。明日の土曜も練習試合でE達と一緒にですよ。考えすぎ！もういいですか』とせかされた。それでも念のためにと、このグループとは一線を画していると思われるおとなしめのグループのFを個別に呼んで「Eさん達のグループって、仲いいのかな？だれか仲間はずれてない」と聞いてみた。しかしFは「ええっ、ウソ！私グループ違うからぜんぜんわかりませんが。でもEたちって、クラスで一番いけてるし、いつもつるんでそんな噂も聞いたことないし。うちのグループの方がちょっとねえ」と思わせぶりに自分たちのことを心配してほしいような話しぶりだった。

最後に、Eのグループに入っているがその中でも担任からみたら中立的と思われるGに「最近グループで代わったことないかな。みんな仲良くやってる？」と尋ねてみた。するとGはきりっとしてきつい表情を浮かべ「先生、みんな言ってたんですよ。先生が探偵みたいに聞き込みしてるって！どうして私たちのグループばかり疑うんですか！男子の方がやばいのに。スパイみたいに聞かれても、仲いいから何も言えない！！ひどい！>と怒りで射貫くような目を担任に向けて問い詰めてきた。ここまでして、担任は「やはりアンケートはいたずらだったのだ」と、ようやく安心したのだった。

しかし、それから1ヶ月もしないうちにDがさみだれ登校（注3）しはじめ、夏休み明けには完全に不登校になった。11月から家庭訪問し始めた女性のスクールソーシャルワーカー（SSW）とは30分程度だが話しているとのことだったが、好きなタレントが同じだという話から次第に打ち解けたようで、SSWの訪問を楽しみにするようになった。そして年度末の3月、SSWの最後の訪問日、彼女がEたちから非常に陰湿ないじめを2年になってからずっと受けていたことと打ち明けたことから当時の事実が明らかとなった。

（注3）さみだれ登校とは、継続的に毎日学校へ行くことができないのではなく、週に数回学校を休むが、その他の日は遅刻したり早退したり、あるいは普通に登校するなど、降ったり降らなかったりする「五月雨」のように、行ったり行かなかったりを繰り返す状態のこと。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

＜考 察＞

事例に登場するDはもちろんのこと一別のグループであるF、グループは同じだが中立と思われたG—この2人もDがEたちからいじめを受けていたことを知っていた。実は、後にDがSSWに打ち明けたことからわかったのだが、Dへのいじめは、当時、担任以外のほとんどの子ども達を知っていたことだった。アンケートの記述は精一杯の担任へのSOSだったのだ。なぜ、担任には最後まで本当のことが知らされなかったのだろうか。

事例からうかがえるかもしれないが、この担任は決してこのいじめ問題に関していい加減な対応をしたわけではない。可能な限り、事情を子ども達に確かめようと手を尽くしている。子ども達も、この担任に対して否定的な思いがあるから嘘をついたというような事情は見当たらなかった。本間(2008)はこのような状況を、「羅生門的現実」と名づけ、「現代型いじめ」への対応の難しさを指摘している。

本間も述べているように、思春期の子ども達は、この担任でなくてもほとんどの場合、いじめの事実や不登校の理由などを教師はおろか母親など一番身近な家族にも語らないばかりか、この事例のように明るく振る舞うとか、心の内とは正反対の虚偽のことがらを伝えることが多い。なぜ、子ども達がそうするのか。その答えの一端は、II、III章で述べてきた。すなわち、Dがいじめられていることを担任に告げられなかったのは、彼女が抱える自己否定的な心情から推察することができるだろうし、FやGがEのいじめられを認めなかったのは、クラスに漂う同調圧力という空気のせいだったのだろう。実は思春期の子ども達は、彼らを感じる同調圧力や他者に迷惑をかけている存在との自己否定的な思いから、自らの気持ちを他者に伝えられない、あるいは意思として伝えたくないという考えを抱きやすい。

しかしながら同調圧力や自己否定という特徴のみで、このことを説明できるわけではないだろう。そもそも自らの思いや考えを周囲、とりわけ教師や親などの大人に向かって秘匿する傾向は、思春期の重要な発達の特徴そのものなのである。周知のように思春期とは、第2次性徴を中心とする身体的な変化とともに具体的操作から形式的操作へと認知能力も大きく変わっていく。その中で周囲の大人達への見方や態度も大きく変化する。

この点に関しては、最終章において再度述べることとなるが、大部分の子ども達は、大人達に対して、これまでの大切に守られていた感覚よりも、心配や負担をかけてしまうという重荷ともなる心情や、さらには干渉される、拘束されるという否定的な感情が生じてくる。この時期のことを山中(1978)は“思春期内閉”と指摘しているが(注4)、その結果、大人からの影響力を回避し、あるいは排除する方向、すなわち世代間の境界を作るような傾向になりやすい。しかしこのことは同時に、子ども達に孤立への不安を生み出す。そこで大人に代わって同世代との親密な関係を求め孤立への不安を解消しようとする。このことはII章で述べた同調圧力にもつながるが、決してそれのみではない。むしろ同世代との親和的関係を築き、将来の社会的関係を営む基盤作りという意味も孕んでいる。

すなわち、子どもから大人への移行期間にいる思春期の子ども達にとって、同性代との関係はこの時期に抱える孤独を解消するという消極的な側面に留まることなく、社会的自立への基礎という、より積極的な意義を持っているのである。そのことが、この事例で見られた大人への嘘、欺き行動の発達的な視点からの意味なのである。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

したがって、この事例で見られる大人との境界の設定は、同調圧力や自己否定を超えて、思春期の子ども達にしばしば見られる重要な発達の心性であり、この点も十分に踏まえながら、彼らへの支援を考えていく必要があるだろう。

(注4) 思春期研究の先達として知られる山中(1978)は、周囲から孤立したこの時期の子ども達の状態を“思春期内閉”とし、豊かな内面を育てるための時期であるとその肯定的な意義を述べている。

5. 不登校への支援

以上述べてきたように、思春期の子ども達を感じている同調圧力や自己否定、さらには大人との世代間境界の設定などが不登校という行動と深く関係していると思われる。このような彼らの特徴を前提として、本章では、不登校の予防や不登校となった子ども達への支援について、具体的な提案を行いたい。

5-1 同調圧力を低下させる取り組み

通常日本の子ども達は、1人の担任教師を中心とした40人ほどの同年齢の子ども達からなる集団を基本単位に、日々の学校生活を送っている。とりわけ、中学校までは同一メンバーで構成されるクラスで1日の大半を送ることとなる。しかも、通常はクラスからの離脱は許されていない。たとえば、クラス成員や担任教員との関係の悪化のような事態が生じて、他のクラスへの移動は認められず、このクラスで少なくとも1年間は過ごさねばならない。クラスとは、一面において子ども達を長時間拘束する閉鎖集団なのである。

このようなクラスの状況を集団力学的に見れば、きわめて強い同調圧力がクラスの各メンバーに作用することを意味している。よって、これまでの事例でも見てきたように、この同調への圧力が、不登校を形成する上で子ども達に大きな影響を与えることは、ある意味、当然とも言えよう。また、事例から抽出された不登校と関連する子ども達の自己否定的な特徴も、単に思春期の一般的な心性にとどまることなく、クラスという集団の中での同調圧力の影響の下でより強化されていると考えられる。実際、事例2のBはクラスの友人達や担任に迷惑をかけている存在として自己を認識し、また事例3のCもいじめ被害者にも関わらず、クラスの友人達からいじめられても仕方がないと、自らにも非があると感じていた。このようなBやCに見られる自己否定的な心理状態は、集団の中にある目には見えないが確実に存在する空気のような同調への圧力に、うまく対応できない自分への苛立ちや劣等感などから生じている。すなわち、同調圧力が子ども達の自己否定を増幅し、不登校へと子ども達を退けさせる斥力となっているのである。

しかしながら、子ども達同士の仲がよく協力的なクラス、学習にも行事にも積極的に取り組む活気にあふれたクラスのように、凝集性の高いクラスを創り上げること自体は、クラスづくりに必要であることは言うまでもない。

よって、子ども達の協力的で積極的な姿勢を引きだすと同時に、それらが行き過ぎや過剰となることを避けるようなクラスづくりや学級経営から同調圧力の低下の課題に取り組んでいく必要がある。言い換えれば、自立的で適度な対人距離に支えられた協調性を高める一方で、依存的で不安定な対人距離からなる同調性を高めないような取り組みが肝要なのである。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

たとえば以下のような工夫をすることによって、極端な同調性を子ども達に求めることなく、子ども達を集団から浮かびあがらせることなく、ほどよい距離で存在し合えるようなクラスが実現できないだろうか。

*単一の行事を実施するのではなく、複数の行事を並行して実施する。

具体例：行事の名称を「文化フェスティバルディ」とか、「スポーツディ」など、内容に幅を持たせるものとして、文化なら「合唱部門」「科学部門」「調理実習部門」「アニメ部門」「ゲーム部門」・・・、スポーツなら「卓球」「水泳」「バスケットボール」・・・など、複数の企画を設定して希望する部門に参加できるようにする。

この企画・実施においては、フリースクールのスタッフなどの外部からの支援を積極的に活用する。

< (3) 案にも >

*選択制、講座制、縦割り（複数学年）受講制の授業科目を設定する。

具体例：音楽、美術、技術家庭などの教科を「創造」という総合科目とし、時間割に同じ授業を複数組み入れる。子ども達はこれらの授業を、曜日や受講時間、各科目、担当者などから選択できる。結果的に複数学年が同じ授業を受講することもある（原則的に数学や英語など、学年別段階的に習得する科目は、クラス単位、学年単位とするが、その他の教科は、このような選択受講が可能である）。

*部活動の複数所属、部活の目的別の設定による複数所属制度を導入する。

具体例：技能を高め校外での大会出場などをめざす部活動と参加し楽しむことを目的とする部活動に区分する（サッカー部とサッカー交流部、吹奏楽部と軽音楽クラブなど）。後者の部活動の場合、活動日を月水金、火木など、1週間の1～3日と限定し、複数の部活動に所属できるようにする。指導者として、地域ボランティアをはじめとする外部からの支援を積極的に活用する。< (3) 案にも >

これらの取り組みによって、クラスの他者との比較から生じるプレッシャーや劣等感、周囲から強いられる到達や達成への圧力などから、かなりの部分自由になることができる。すなわち子ども達が、クラスとの関係を超えて、個人としての自由に活動可能な空間を設定することができるとともに、クラス全体から受ける無言の同調圧力を分散するとともに、無用な同調圧力の上昇を抑制することができる。

5-2 自己否定感を抑制する取り組み

5-1でも述べたように、不登校に影響を及ぼす子ども達の自己否定感は、同調圧力によって強化される。よって、5-1の取り組みは、自己否定感の改善にもつながることが期待される。

だが、自己否定感を軽減し、逆に自己肯定感を高めること自体を目的とした取り組みには、どのようなものがあるのか。以下に列挙する。

*誰でもが肯定的に注目される機会を作る

具体例：朝の会で、誰でもが勝者となる簡単なゲームを定期的（毎日、月水金の3日間、週1回など）に、企画し、記録を掲示する。じゃんけんゲーム、あみだくじゲーム、ビッグナンバーゲーム（学級の子どもの人数分の数字カードを作り、裏返して引いて一番大きな数を引いたら勝ち）など

*全員一律の達成目標でなく、個人の選択や決定を含む目標とする。

具体例：遅刻ゼロ、忘れ物ゼロなど、全員一律の「ゼロ運動」ではなく、Aは「一週間の忘れ物回数5回以内」、B「一週間の忘れ物回数10回以内」など、各自が自らの現状に合わせて目標を設定する。

*子ども達が他者から感謝されるような機会を授業や行事に取り入れる。

具体例：総合学習を利用して、地域の幼稚園や高齢者施設と交流し、自分の存在が他者の役に立っている経験を積み重ねる。現地での指導や引率には、外部からの支援を積極的に活用する。< 5-3案にも >

*2つめの成績表を作成する

具体例：自分が一番得意な、あるいは好きだと思う教科に関して、学期の始めに自分で到達目標を設定する。（元素記号を全部覚えます or 年表を作りますなど）それを達成できたかどうかで、教科担任から、絶対評価の成績表（賞状形式など）をもらう。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

*自分の意見を「伝える力」を養う。

具体例：スピーチ、プレゼンテーション、ディベートの能力を養うために、外部の専門家の指導を受ける機会を設ける。プレゼンテーション力をつけるなどのパソコンソフトを活用して、いつでも繰り返し練習できるシステムを導入する。〈(3)案にも〉

*子ども一人一人が自分ができる自己表現する場を継続的に設定する。

具体例：終わりの会、総合学習、学期末の特別時間割などの時間を使って、各自が一学期の1回、自分の時間(1、2分程度からはじめてよい)を持ち、自分ができることを発表する。この場合、「1分間スピーチ」など教師が分野を決めるのではなく、子どもができることを披露する場となるように企画する。内容は、絵画、スポーツ、スピーチなど従来のものだけでなく、瞬間芸、コントなど、子どもの目線で選んだものを認める。

*クラスの子ども間を受容的・共感的な関係を促進する活動を行う。

具体例：SC、SSWなどが道徳や学活などの時間を活用して、関係づくりや相互理解に関するグループワークや心理教育を実施し、受容的で共感的な集団づくりを目指す。周囲の仲間から共感的に受け入れられ承認される体験を通して、子ども達は過度な自己否定に陥ることを防ぐことができる。〈(3)案にも〉

5-3 世代間境界の緩衝材として—教員以外の学校支援者

(SC、SSW、ボランティア、外部支援機関など)との連携や協働

最後の提案として、不登校支援では今後さらに必要性が増すと考えられる学校支援者との連携や協働について述べておきたい。

これまで記載してきた事例では、不登校の子どもたちがその心情を吐露する対話の相手は、教育支援センターのカウンセラー(事例1)、SC(事例2)、フリースクールのスタッフ(事例3)、SSW(事例4)と、教師以外の対人援助に関わる人たちである。これらの事例のみならず、多くの事例で思春期の子ども達は相談相手として家族や担任以外の大人達を求める傾向があることは、一例をあげるならば、臨床心理士を中心とした外部の専門家がスクールカウンセラーとしてすべての都道府県で活用され、不登校援助の有効な対応策として20年以上にわたって継続されていることから明白であろう。もちろん、思春期の子ども達にとって、家族や教師達が悩みを打ち明けられない信用ならない否定的な存在なのではない。事例4で述べたように、思春期の彼らにとって、家族や教師に悩みを打ち明けることは、最も身近な大人達に心配をかけること、負担を背負わせることなのである。自分をいつも気遣ってくれる保護者にそれ以上の問題を知らせることは、彼らにとっても負担となる。自分に期待し、頑張る自分を評価する教師にも、惨めで弱い自分をさらけ出したいくないし、教師から保護者にそんな自分の負い目を伝えられるのも、同様にどうしても回避したい出来事なのである。思春期の子ども達にとって、家族や教師は決して否定的な存在、嫌悪する存在なのではない。実は家族や教師は、彼らにとって大切な存在、嫌われたくない存在であるからこそ、彼らが悩みを打ち明けにくい対象となってしまうのである。

ここで、このような緊張状況を緩め和らげることができるのが、彼らと家族関係もなく、師弟関係もなく緩やかな適度な心理的距離のある大人の存在なのである。したがって、不登校をはじめ思春期の子ども達への支援として、教育支援センターなどの学校外の居場所を充実することはもちろんだが、事例でも示したように、今後は、SCやSSWなどの専門家だけでなく、ボランティアやフリースクールのスタッフ等、多様な人材と連携し時に学校内に招聘するなどして、子ども達と交流の場を作ることが重要な支援となる。たとえば上記(1)(2)で示した具体例の末尾に〈(3)案にも〉と示した取り組みによって、積極的にこれらの人材を活用することは可能であろう。

6. まとめにかえて ―思春期と不登校―

思春期とは、第2次性徴の発現により自らの身体の変貌に違和感を抱くことから幕を開ける。この時、自らが持っている自身の身体イメージと現実の身体の変化を至極当然として親和的に受け止める子どもは多くはない。彼らの大部分はこの事態を既知で自明とは受け止められず、未知なる身体変容に危惧を抱き、混沌とした思いを持って自己の身体を違和的なものとして観察するようになってしまう。日々、微妙に変化する自らの身体に触れることによって、この不明な身体への視線の延長上に、心も含めた自己の存在全体への凝視がはじまる。こうして、生まれて初めて自己を自身から切り離し―このような思春期心性を椰月（2011）は、その作中で“幽体離脱”と表現している―、「一体全体自分とは何者なのか」を自問しはじめるのである。

そしてこの問いを抱いた瞬間に、子どもは自分と他者という境界があることを自覚し、自分は自分という唯一の存在であり、他の誰にもわからない自分を自覚し、孤独である一方で自在な世界に存在していると感じはじめるのである。換言すれば、「自分とは何者か」を自問し、一人の人間としての自分を見出すために、彼らはそれまでなくてはならなかった大切な家族との絆を断ち切らざるを得ないのである。

さてこうして家族という母港と自らを結んでいた絆の艦綱を切って、単独航海へと向かう彼らの行く手は、当然ながら良風快晴の一日ばかりではない。中一ギャップという暗礁、向かい風にひるむ日々もあるだろう。そんな彼らを勇気づけるのは、彼らの周囲の海原を、同じようにこぎ出している自分に似たような小舟、つまり幾人かの級友の存在なのである。それらの小舟は、ある時は自分よりも少し先に進み航路を示し、あるいは気がつく自分の真横で同じような併走し、時に遅れて辛うじて自分についてくる、そんな友達の姿こそ、この孤独な航海の追い風となる推力なのである。ところが何らかのきっかけで、ともに航海する級友たちを見失い、自分のいる場所が仲間など誰も周囲にいない孤独な海原であると感じたなら、彼らの航海は、まさに疾風怒濤の荒波に一人で漂流するが如くの辛いものとなるだろう。IV章で述べたように、家族から心理的に離れて同世代の他者との親密性を求めることとは、もしその営みに失敗したならば、同調圧力に押しつぶされ、自己否定感にさいなまれ、孤独感に身をさらすことに直結する危険性を孕む事態なのである。このような危機にさらされた子どもが選ぶ航路の一つが―母港に一旦引き返し、エネルギーを充填し再度の航海に望む準備をする―不登校という危機打開策であると筆者は考えている。

本稿では、不登校状態になった子ども達への個別の支援よりも、思春期という時代を航海する子ども達の活動の場である学校が、少しでも安全で居心地よい居場所となるにはどのような援助が必要かという視点で、思春期と不登校について論じてきた。

不登校という行程は、決して子ども達にとって、無意味で不必要な挫折でもなく、後退でもないと思う。しかし、思春期の特徴を考慮したできる限りの対応策がこれからも取り入れられることによって、学校での過ごしにくさを抱えている子ども達の一人でも多くが、不登校に至ることなく学校生活を送っていくことができるように願っている。

論文特集「現代社会と問題を抱える子どもたち」

参考文献

- 朝日新聞 朝刊 2016.10.28
- 本間友巳 2008 いじめ臨床とは—その理解と意義— 本間友巳編著 いじめ臨床 ナカニシヤ出版
- 井上 烈 2013 フリースクールにおける学習支援；学習支援ニーズの高まりと居場所づくり 教育・社会・文化研究紀要 13,17-32
- 木南千枝 2005 学校内適応指導教室としての別室登校の試み 臨床心理学 5 27-33 金剛出版
- 文部科学省 2016 平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果（速報値）について 小・中学校の不登校より
平成 28 年 10 月 27 日報道発表 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm
- 中川美保子 2006 居場所としての適応指導教室—臨床心理学的な視点から— 忠井俊明・本間友巳編著 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 中川美保子 2012 教師への支援 村山正治・滝口俊子編 現場で役立つスクールカウンセリングの実際 創元社
- 野田正人 2012 スクールカウンセリングとスクールソーシャルワーク 本間友巳編 学校臨床 子どもをめぐる課題への視座と対応 金子書房
- 徳田仁子 2000 スクールカウンセリングにおける統合的アプローチ—心理的援助と学校教育の相互作用—心理臨床学研究 18(2),117-128
- 山中康裕 1978 思春期内閉 Juvenile Seclusion—治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理—中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社
- 椰月美智子 2011 忘れられない夏 「飛ぶ教室」2011 年 26 号 光村図書出版